

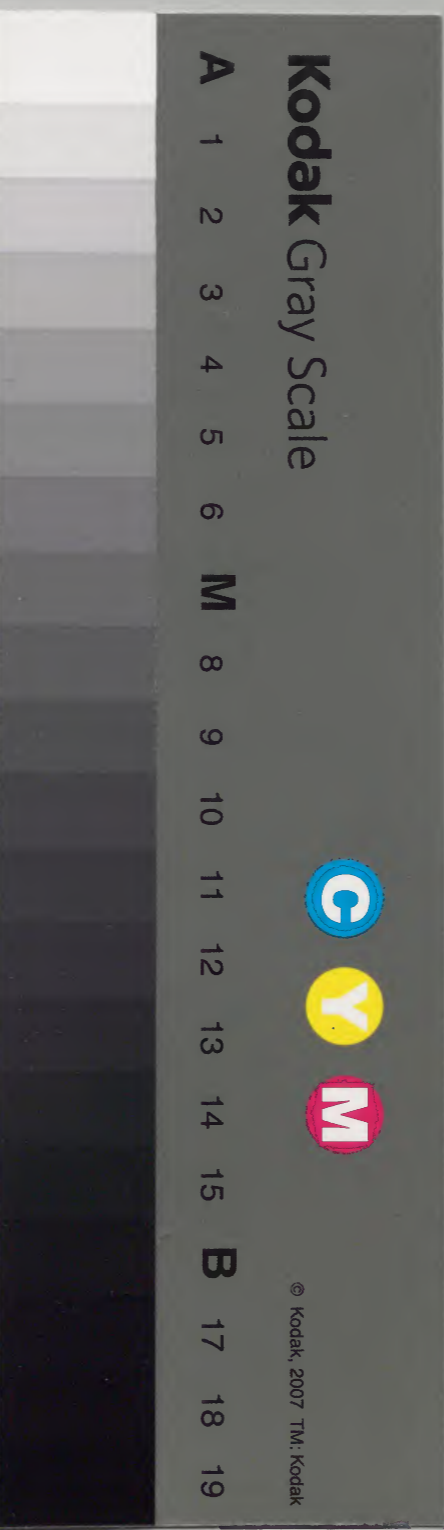
日本書紀傳 七卷下

和 一〇五二二號

十三

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (22)	
函號	特	85 1

戸部省蔵



文部省

廣敷復長陽の
廢可訓日共

圖書
文庫

南政官
文庫

○改復巡柱ハ先ハ陰神ハ左より陽神ハ右より天柱
 を往巡り給へりしを此度ハ陽神ハ左より陰神ハ右
 より順次を改て巡り直し給へる由ふり但正書ハ事
 既不祥宜以改旋々有ハ陽神左旋陰神右旋して其御
 巡ハ前後共ハ等しきを又巡り直して唱和の御事を
 改給ハし由ふて其改と此改と指す所同くさる
 者ふり思誤る可くす古事記も右の正書の趣と同
 共ハ異ふる事無ク故ハ天神之命以布斗麻迺ハ前後
 相而詔云因女先言而不良亦還降改言故ハ反降更往
 廻其天之御柱○陽神自左陰神自右ハ先ハ約束曰妹
 如先と有ふり自左巡吾當右巡と契給ハし事を改換給へるふり偕

内一六八三條

此傳ふてハ巡柱の事ハ陽神の御定ハ在て天神ハ係
づふ事無く此度ハ至ても唱和の御事ころハ婦人
之辞其己先揚乎と宣へれ巡柱の次第迄ハ教給ハご
りけれバニ神の御心として如此く致給へる趣ハ
見ゆれども甚く心行ぬ事ふり其ハ御言の前後も甚
く大事ハ有れども御行の順逆を取失ひ給へる
程の御手違ハ非れバニ神ハ於ても其判断ハ何と
御評め有べく天神も亦其一事を漏り給ふ所を以見
れバ此ハ傳の誤ふる可き事上件次と論へるが如く
此ハ甚く可畏き事ハ有れども同ト事のニハ傳ハ
れる中ハ何れが正何れが一ハ訛ふとざる事の無

△の巡柱相遇の如
く訓べし此

趣意を貫き見て今定るふり○既遇之時ハ上ハ既而
分巡相遇と有が如く物爲給へりふり正書ハ於
是ニ神却更相遇是行也云くと見えたり第五一書ハ
更復改巡則
陽神云くと有て遇給ふ事○陽神先唱曰妍哉可愛少
ハ云ざれども同ト事ふり○陽神先唱曰妍哉可愛少
女歟陰神後知之曰妍哉可愛少男歟と有て是行ハ順
次宜く美ハく唱和給へり此言靈の幸ハへるハ
因てニ神の珍子と愛くし給ふ大八洲國を生成し
坐るふり言靈の事ハ己ハ右ふゆ註せるを允て人ハ
ハ言計り尊く奇くき物ハ非るふり先ハ陰神の御言
過有くハ言靈の幸延行べきを戻れるふて其事の祥

祝ふ事_レ此即言靈能佐吉播布國又十三_ナ小葦原
と上_レ云_レ受_レた_レ者_レあり_クし
水穗國者神在隨事舉不為國雖然辭舉叙吾為言幸真
福座跡急無福座者荒磯浪有毛見登百重浪千重浪敷
尔言上為吾と有も此の故事を以て詠るふり其ハ上
小も註せる如く次度_ハ二神の唱和の御事も陽神
ハ先_ハ陰神ハ後_ハ其當_ハ然_ル可_レき任_ハ神在隨_ハ物
為給へる故_ハ其言靈の幸延て事舉為ずして神在隨
小治る可_レ怜御國と成始れる由の古傳を取て今更_ハ
辭舉して祝ふ事の有_ハ當_テ如此く物為_ハ小_ハ其言
靈の幸延て急_ニ無_ク福_ク有_ハひと百重千重_ハ言舉為

と云るふり右の言幸真福座跡と有ハ言靈の幸延坐
と云事_ハ其證_ハ志貴嶋倭國者事靈之所佐國叙真
福在與具_ハ被_レ知_レたり言靈の幸延事_ハ其神在て
其言の任_ハ祐_ケ給_ハ不_レ依_レれ_ハバ又此_ハ甚能合へり
天神の御言_ハ婦人之辭其已先揚乎と有_ハ辭舉と云
事の因所_ハ不_レる又十三_ナ小蜻嶋倭之國者神柄跡言舉不
念心不知哉云_レと詠_ル中_ハ吾者事_上為_ハ天地之_レ神也甚吾
て吾念心不知哉と云_レハ南言_ハ出_テぬ由_ハて上_ハ
了神柄跡言舉不為國と尚仁明天皇御紀長歌_ハ申上
云_レ序の照應_ハふ_ハり
流事之詞波云_レ此國乃云傳_ハ布良日本乃倭之國波言
玉乃當國_ハ度_ハ古語_ハ流來_ハ留神語_ハ傳來_ハ留事_ハ乃任_ハ云

日本書紀傳七

九十一

と見えたる言玉乃當國と有も右の事靈之所佐國
叙真福在と有も當りて言を以物を祝祢ふれ言靈
の幸延八所佐る小依て真福く其徴有る國と云事
ふり右の言玉を一事玉小作るハ共小借字小て言
郡從四位下事玉明神と云有ハ景行天皇御紀小日本
武尊速干碓日坂時日本武尊每有顧弟橘媛之情故登
碓日嶺而東南望之三歎曰吾孀者耶故因号山東諸國
曰吾孀國也と有て此御言小依て山東の國名とも成
れる由ふぞ小依て其言靈大鏡小朱雀院天皇の生坐
神を祀れるく否とく
る御五十日の餅殿上小出させ給へる伊衡の中將一
年小今宵計ふる今よりハ百年迄の月影を見むと禱
き申せるを醍醐天皇の御答祝ひつる許登多麻ふし

ハ百年の後も盡でぬ月をこる見ぬと見えたる此御
歌玉葉集七部賀ふも被入て延喜御製と記てれ伊衡の
中將を参議伊衡と出其歌の初句一年を日を年小と
換ねるぞ其ハ如何小在れ百年迄の云くと禱申され
くを受て許登多麻とハ答給へるふて其禱言の徴有
む事を御心小含コメさせ給へるふて上の例共の如く又
掘河百首小言靈後醍醐朝臣の思束無さ小岡見すと揃ふがも
年を越す歳と詠れたるも年歳の暮ふハ来年の吉詞ふ
てを述て其言靈の幸延を祈る事ふるが其も思束無
小依て岡見する由ふて言靈の義上小同平田翁説
とて或人

云く蓬之慰こ小抄云岡見とハ十二月晦日夜簾笠を
着て木の末こ上り我家を見れば一年の中こ在べき
事皆見ゆふり然れハ梢あぐこ一年を越すと詠り
今俗節分或ハ除夜菓樹有る家ハ一人樹上こ上り
一人斧を携て木の木こ臨み其木ハ向ひて来年能実
生や実生こざるやと云時樹上こ居る人成申むと答ふ
如此為れハ来年能実生と云り是言靈の幸福有ふり
然れハ然る所為民間こ在る故ハ梢あぐこ一年を越
す哉と詠れこハや岡見とハ并こ為ると云ハ彼豊
饒を祈るふり可こ此朝臣の斯る事を取こ出て上干の
口こ任せて詠れこ事々々こ然れハ近俗の爲る
所も古俗の遺風こふる可こ有ると云り今思ふこ岡見
ハ招見こて言を以て一年の事を禱て其幸こ有や右等
有こずやと捎末こ上りて招こ寄せ見る心を聞ゆ右等
ハ言靈の幸ハふ徵信有る例共ふるガ二神の唱和の
御言舉こ始れる由云るハ餘りこ牽強キツケたる如く思ふ
くむ人も有ふめども猶万葉十一丁十三 小事靈八十衢

夕占問占正謂妹相依と有ハ次こ玉梓路往石占相妹
逢我謂と有こ照こ見れハ彼过占と云者の事ふるガ
事靈八十衢と云こ此二神こ係れり
書こ伊弉諾尊追至伊弉册尊所在處云く因將出返云
之盟之曰旗離又曰不負於旗乃所嗤之神號曰速玉之
男次掃之神號曰泉津事解之男允二神矣と有て陰神
小言勝給へる是其一其第九一書小時伊弉諾尊乃
投其杖曰自此以還雷不敢來是謂岐神と有る是其二
ふり其第六一書小伊弉諾尊云く便以千人所引磐石
塞其坂路與伊弉册尊相向而立遂立絶妻之誓時伊弉

冊尊曰愛也吾夫君言如此者吾當縊殺汝所治國民日
將千頭伊弉諾尊乃報之曰愛也吾妹言如此者吾則當産日
將千五百頭と此ふても言勝給ひて是其三ふるが右
の千人所引磐石ハ八衢比古神ハ衢比賣神ハ坐を岐
神を合せて衢神と申す由己ハ道饗祭詞講義ハ註せ
るが如く然るを此神ハ就て过占の云事の出来るハ
依て事霊八十衢と云古語の有と思ふハ本末違へる
ふり伊弉諾尊の言勝給ふ言霊の幸延るハ依て黄泉
神を防ぐ右の三神ハ成坐るハて伊弉諾尊の御心の
占正しく相叶へりハ因て又八十衢ふて占ふ事も

出来り者ふり右の歌を拾遺集十三ハ正しくてハ
逢ふ可く有ハ訛れるふり又万葉十六恋夫君歌ハ
百不足八十乃衢ハ占ハタ占ハトハ毛曾問云く反歌ハ
ト部字モハ十乃衢モ占雖問云く事有れども唯
ハ十乃衢と云て上ハ事霊と云語の有と同トク
ざれば紛る事勿れ尚然れば二神の唱和の御時
彼講義ハ就て明く可く然れば二神の唱和の御時
先度ハ陰神の先ハ言舉給ひハ因て生坐る御子
の祥ハくくごりハ後度ハ陽神より陰神へ次
序正しく唱和給へりハ因て其言霊の幸延へて
生坐る御子の自ハ良ハくく事明くくふる者ハ
り石の万葉歌ハ神代欲理云傳々良久と云ハ仁明天
皇御紀歌ハ古語ハ流来礼神語ハ傳來礼と云るふと

此二神を指し事右に引る微共を考通して曉る可き者ふりり猶言靈の事ハ己ハ祈年大御巫祭神詞講義ハ註せるを此ハ宝鏡開始章第三一書中臣連遠祖與台産靈兒天兒屋命の下ハ就て云バを其始ニ神の唱知ハ起り初たる事を今云ふり
○右の陽神左旋陰神右旋の御事ハくも少縁ふる所由ハ非る事傳六六丁ハ註るガ如く天地の初より定れる神隨の道ふり其ハ天御中主尊天中ハ成坐る後ハ高皇産靈尊神皇産靈尊の成坐るハ己ハ左右の位定れるふり又此二神ハ男女ハ渡りて給ハ前後の次第有事云も更ふり其ハ上二十ハ引る立后儀宣命ハ食國天下政波獨知倍物不有必母斯理倍乃政有

倍之有を以て所知たり若て可美葦丹彦鬯尊天常立豊野尊ハ因て地後定る此即上下の差別有ふり若て天ハ陽ハくして男ふり地ハ陰ハくして女ふる事誰も知れる天の左旋り地の右旋り有ふと皆共ハ天御中主尊の天中ハ在て巡る事ふるガ二神其ハ則取て國中ハ天柱を化豎給ひて陽神ハ左ハ陰神ハ右ハ分巡りて相遇給へるハ実ハ天地の道理を盡させ給へる者ふり此ハ因て二神の生成給へりハ國土萬物共ハ各男女の形を具へたる事即天津神隨の道ふり其ハ國土ハ男女有ハ古事記ハ見えて傳六ハ洲國の下ハ註せるガ如く又其男女有る國土の上ハても山川

ハ自然ハ男女の象ふり又其山ハも男女有る事ハ
 也万葉一十一三山の御歌ハ因ハ高山耳梨山ハ男ふ
 り雲根火山ハ女ふり同九ニ十ハ登筑波山時歌ハ上
 ハ二並筑波乃山ハ云て下ハ男神モ許賜女神モ千羽
 日給而ト有ハ即男女有ガ故ふり此等ハ其形勢の自
 然ハ依て男女と成れるガ川ハ何時モ女ト見えて古
 事記ハ日河北賣勝門比賣等の名出たり餘ハ准ハ
 一知べハ平田翁説ハ皇祖天神の成出給ハる物共ハ
 天地ハ更ふり人類萬物ハ至る迄男女左右
 の眞理を自然ハ備たる者ハ其ハ天地ハ男女の理
 を具へて有る事ハ誰モ見ざる任ハ知れ人及生ト
 生る物ハ男女の體を具へざるハ無ク鳥の雌ハ右羽
 を上ハ爲ハ雄ハ左羽を上ハ疊收ハ類の北ハ右ハ卷

ウ牡ハ左ハ卷キ草木又男女の差別有事誰モ知れ
 ガ如ク又ハ神ハ男神ハ坐故ハ火炎ハ左ハ上リ水神
 ハ女神ハ飄ハ吹ハ左ハ右ハ有る皆自然の性ふリ云
 ふる故ハ実ハ右の如ク男ハ左ハ女ハ右ハ又男ハ前
 然ハ言ハふハ右の如ク男ハ左ハ女ハ右ハ又男ハ前
 女ハ後ト神隨ハ定れる道ふるガ故ハ倭姫命世記ハ
 左物不移右物不移左左左右右左返右迴事モ萬事
 違事無_{久志}太神_仁奉仕元元本本故也ト云古語有り
 此を誰クモ例の偽造の如心得めれども五部の書の
 成れる其より以前ハ出来れる大中臣能宣記ハ此
 語を載たるハ皇御孫尊御天降ハ就て天照太神の三
 種神宝を事寄ハ奉ハ一ハ時ハ詔給へリハ大詔命ハ

今古事記高津宮
殿大御歌、岐備
比登、等母迹斯
都未波と見え
万葉二、天地與
共將終登又天
地日月與共と
有る共是あり

ふれども大殿祭詞別、皇御孫命乃同殿能裏云
と有れば於那自美夜尔と訓べく共住ハ宗神天皇御
紀不依て共尔住給と訓べきふり記傳不引れとるふ
夜尔と訓共住を唯ハ須美麻志氏と有て甚と雅ひ
りふハ有れども神紀の訓ハ然耳ハ定て訓難けれハ
今故同宮共住ハ而竟彼ハ尋之殿ハ共尔住給ふ事ふて古
事記ハ久美度迹興而生子と有と同ふ事ふれども宮
と云と殿と云との差異ハ有ふり殿と云ハ右の久美
度一所を云と狹きを宮と云ハハ御殿ハ更ふり御垣
も何も備りたるを云ふり其證ハ宝劔出現章ハ素戔
鳴尊遂到出雲之清地正馬云於彼處建宮或云武素戔鳴乃相

與ト造合而生兒大己貴神因勅之曰吾兒宮首者云々
と有るを見べし右の建宮と云ハ其久美度ハ更ふり又
ハ重垣ハ至る迄不備りたるを云ふる事其前後の文
を見合せて曉る可し又天孫降臨章第一書ハ高皇
日隅宮者今當供造云々又將田供佃又為汝往來遊海
之具高橋浮橋及天鳥船亦將供造又於天安河亦造打
橋又供造百八十縫之白楯と有る見べし其殿耳ふり
ず其殿ハ属たる所迄をも作備へて天日隅宮と云を
見て可し然れば右の八尋之殿ハ御垣又御門共尔形の
如く備れる宮ふて二神の御世の限り諸共尔住給へ
り宮處ふりける者ふり能く神代の例共を合せ考
て其御有状をふむ想像り奉る可かりける○正書ハ

△隱岐之三子島四小

ハ及至産時先以淡路洲為胞意所不快故名之曰淡路
洲之有ハ淡洲と混ひたる傳ふが其小為ても淡路
洲を大八洲國の員外小為るハ誤ふり其小ハ一ハ大
日本豊秋津洲二小伊豫二名洲三小筑紫洲四小隱岐
洲五小佐度洲六小越洲七小大洲八小吉備子洲ふる
を此小ハ淡路洲をも收たるが一ハ大日本豊秋津洲
二小淡路洲三小伊豫二名洲四小筑紫洲五小隱岐三
子洲六小佐度洲七小越洲八小吉備子洲ふて大八洲
の數小合るが大洲ハ此小漏たり此一書ハ古事記マ
同傳ふる小如何小
鳴二小伊豫之二名嶋三小筑紫嶋四五小伊伎島六小津

二第

島七小佐度島八小大倭豊秋津嶋ふて右の吉備子洲
大洲等ハ大八島國の外小在て又越洲と云ハ無ふり
○隱岐三子洲上小説り傳六百三十
一書曰伊弉諾尊伊弉册尊
二神立于天霧之中曰吾欲
得國乃以天瓊矛指垂而探
之得礫馭盧嶋則拔矛而喜

○日本書紀傳七

○九十九

テ ノリタマハクロヨロミキ アモ クニ ハ アリケリトノリタマヒキロ
之曰善乎國之在矣

天霧之中ハ天浮橋の懸れる大虚を云り第三一書
小坐千高天原と有を以知べし但天浮橋と云物の體
ハも別小在しハ非ず其物ハ右の天霧ハ有れ
ども神等の其小乘て往来し給ふ時ハ其質を成
て天浮橋とも天磐船とも成れる事傳六丁ニ小註せる
ガ如くス瑞珠盟約章ハ跋涉雲霧遠自參来中臣壽詞
雲霧又浮雲も同ト物ふり其を大同本記ハ後之小橋
と有を以て浮橋と云物の有状をバ思ふ可き者ふり
備其天霧を阿米能佐岐理と訓るハ甚愛たし四神出

生章第六一書小伊弉諾尊與伊弉册尊共生大八洲國
然後伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃
吹撥之氣化為神號曰級長戸邊命亦曰級長津彦命是
風神也と有る此小照し合せて考ふニ神既小國生
坐し後小其朝霧ハ吹撥ハせ給へるか此小因て思ふ
小天霧の天浮橋の昇降り往来ふ事ハ風氣小依事ふ
り其正書日神の生坐る所小以天柱擧於天上と有を
以知べし風神祭詞小我御名者天乃御柱命國乃御柱
此事傳六丁命止御名者悟奉氏と有る天乃御柱是あり
合了可し但風神ハ何も未生坐ざりし天地の初時小
風氣の事を云ハ如何ふれども元より風氣の有つる
小風を掌る神の後小成坐るふり此小限らず謂ゆる

△八平小桐雲務合マ
云語の有をも思ふ
可

風火金水土の神の生坐ざり以前も風火金水土
共小其物ハ古より有るなり譬へハ金と云物ハ土中
小含め物ハ土を撮り来りて金と云ハ人ハ信
ハござるを其を盪り吹分る時ハ土ハ金ハ金
小別物有が如く其吹分り以前も金無ハ
非れども土中合り居て未頭ハれざりしも同ト事
ふり語例ハ古事記ハ天之狹霧神國之狹霧神ふ見
え此ハ瑞珠盟約章ハ吹棄氣噴之狹霧此云浮枳于
都屢伊浮岐能佐擬理と見え景行天皇御紀ハ氣如朝
霧と有も佐岐理と訓べき所ふり佐岐理の佐ハ万葉
十三ニ四十ハ小桐雲利雪者零来奴左雲理兩者落来ハ桐
曇ハ對へて佐曇と云る桐ハ曇意ふるが佐ハ進
む義有て霧の薫り満行を云ふ朝字狹字の義ハ泥

△六小天雨務合之具
禮字疾

む可ろろろず万葉七ハ天霧相日方吹羅之十ハ天霧相
ハハ天霧之雪ハ零奴可十天霧之零来雪之ふ見
えハハ良之ハ其ハ於煩都加那之
抄ハ訓ハ思合ハ可
書及弟一書の趣ハ異りて此ハ天霧の薫満る其
中ハ包まれて未大地と成べき物の全體を見給ハ
りハ其外ハ心當ハ天神の勅任ハ給へる國ハ
有むを其得給ハむとふり下ハ天瓊矛指岳而探之
と有を以知べ正書ハ底下無國ハ有ハ此漂在
ヤの義ふれハ其大地ハ成べき物を見宣へるふり
弟一書ハ有豊葦原千五百秋瑞穂之地ハ有も其物
を知者ハ別ハ事ハ指ハ岳ハ字ハのハ如ハ佐斯多禮ハ訓ハべ
れハ此ハ別ハ事ハ指ハ岳ハ字ハのハ如ハ佐斯多禮ハ訓ハべ

指ハ御手以て矛鋒を向給ふふり垂ハ天霧の中より下し給ふ事ふれハ舊く垂字を久陀志と訓る其も僻事ハ非れども神武天皇御紀ハ細文千足國と有ハ日本の事ふる物々又此ハ由有り細文ハ鈴屋大人の訓れたる如く麗矛クハシホコハて天瓊矛より外ハ當て心得べき物無れば由有るふくびと考ふるハ千足とハ手垂ふて伊弉諾大神の御矛を指垂て碓取盧嶋を採得坐しハ本着て大八洲國を生給ひけるハ其本の謂を取て此國ハ目け給へりけむと聞ゆれば指垂と云事叶ひて思ゆ此細矛千足國の事ハ國號考の説ハ異ふり神武天皇三十一年御紀の傳ハ

△小私記採得碓取盧嶋云云是

云を待 ○得碓取盧嶋の得ハ上ハ吾欲得國と宣へるハ依てふるハ素より有る地を求得給ひし如く聞ゆれとも熟見れば天瓊矛を以採給ひける即垂落の潮凝結びて島と成たるを得給へる由其ハ正書ハ指下而採之是獲滄海と見えたる其時の狀ハ第四一書ハ有物若淳膏と有が如くふりしを矛を以て採給ひしハ依て泥沙と水と分れて始て滄海ハ出来れるを獲滄海と記されたる獲と此の得と其義一かり
○拔矛の抜を奴伎阿豆氏と訓り上ハ指垂と云る其復りふて弟一書ハ投サダシテ矛と云て下ハ引舉之と有る同く此ハ天霧を隔てし舞しし中へ天瓊矛を指垂て畫探り坐しうバ御手ハ應へて碓取盧嶋を得給へ

りくくバ即其矛を拔舉給へる由ふて此ハ未其天霧
の中ハ坐く間の事ふり次ハ善乎國之在矣と直へる
御言を載せたる其も同く所
ふての事ふて未天降着坐ざり○喜之曰云く此の語
程の事ふり思混ふ可うくずり
勢神武天皇御紀ハ妍哉乎國之獲矣云くと有ハ彷彿
たり其ハ正書ハ喜哉云くと弟一書ハ妍哉云くと有
る唱和の御詞を四神出生章第二一書ハ發喜言と有
を以て右の如く今云ふり然れハ神武天皇御紀ハ妍
哉乎云くと有ハ喜言を發
給へりくふる事申すも更ふり然れハ
此の喜之曰も下ハ善乎と有を云ふり喜を與呂許夫
と訓ハ寄來合カキカヘの義ふて物を得て心を満足へる思を
成を云り右の唱和ふども陽神ハ陰神を得て御心ハ

ハ満足ハハけ思ひ成く陰神ハ陽神を得て御心ハ満足
へる思を成く給へる思其御心の感け至るふ及びて
喜哉とも妍哉とも其喜の御言を發給へりく者ふり
然れば此も國を得給へるハ因て善乎云くと喜言ハ
發給ふハ至れる皆自然の勢ふる者ふり猶四神出生
章ハ於是共
生ハ神云くと故ニ神喜曰云くと有ハ靈異ふる珍御子
を得給へるハ依てふり其弟十一一書ハ保食神の
身より生る物を天熊人の持去て奉進る所ハ于時天
照太神喜之曰云くと有ふ皆物の寄て來合ひたる
時の事ふり宜く宜く取與呂○善乎ハ第五一書ハ
布ふどの類の與呂ハ皆察ふり
美哉善少男と有る善ハ弟一書ハ可愛此云哀と同
く所ハ用ひくれとれハ其意を取て與呂志伎加毛と

三第

づ訓べりける本小與伊加奈と訓る與伊ハ音便小
 く加毛訓と云れ古るるるる然然國小然云例ハ應
 神天皇二十二年御紀大御歌小阿波旒辞摩異椰敷多
 那羅珥阿豆枳辞摩異椰敷多那羅珥豫呂辞枳辞摩之
 摩云くと歌ハセ給ひ万葉一丁天皇登香具山望國之
 時御製歌小山常庭村山有等取與呂布天乃香具山云
 くと見えたるも宣宣奈倍ふぞ云如く物の足具ひたる
 を好するふて善くさ小同ト又發語小御心平吉野乃
 由小ハ非不國の形の足具ひたるを御心小喜給ふ由
 ふる事上の例共小見合す可く六卷讀久近新京歌小
 山並之宜國跡有○國之在笑ハ國之在祁理登詔給
 ふと皆同ト事あり

比伎と訓べり之字小泥ひ時ハ全く漢籍訓の狀小成
 て其言麗美くるるるる儲此喜言ハ二神の未其
 島小降着坐ごり以前小猶天露の中立り程彼
 矛を拔擧たる即宣へり者ふり
 一書曰伊弉諾伊弉册二神
 坐于高天原曰當有國耶乃
 以天瓊矛畫成礫馭盧嶋

○日本書紀傳七

○百四

此高天原ハ神世七代章第四一書ハ高天原所生神云
く有と同一く其高天原ハ天神の所在す天上所ハ
て二神も元ハ其所ハ御在し坐し其勅任し
を承りて此大地ハ御戈鋒の届る計り近く天降来坐
る間の事ふりければ彼天浮橋と云ひ天霧之中と云
る其所ふるが際やうハ又其とも指云ずして此ハ謂
ゆる大虚を云るふり允て高天原とハ天日と中央と
く天極を最頂として云るが本ハて世の限を惣て高
天原と云れば大地の其高天原中の物ふり然れば大
地の周圍の空虚ふる所も素より高天原ふる事云も

更ふり祝詞ハ高天原ハ千木高知也とも高天原波書
雲乃雷詔久極美とも云る皆大地外の空虚を指て廣く
云る称ふり但此等の事を一二僅ハ知て高天原と常
人の説ハ取小足ざるふり猶高天原の委しき説ハ
傳四卷高天原條ハ己ハ云るを猶又天孫降臨章第二
一書ハ高天原と有己ハ口訣ハ高天原指空中而
言と有ハ然る事ふれども此ハ天浮橋ふと細ハ
云ずして其天浮橋の所在を以て大くハ傳たるを
古人も然る心も著ざりけりや未其説得たるを見
ず此項或者の説ハ此ハ高天原ハして礮馭盧島ハ畫
成給ふと有を以て高天原と云るも蒼天の上ハ非
るを知り又此國ハ以前より有て此二神の生給ふ
ハ明非る事を明くハ可く云る妄説を作て留意ハ

諛^レひ其拙伎を世^ニ小^シ術^ヲ由^ルふるハ元^{ヨリ}齒^ヲ小^シ係^ス
 て云^フ小^シも足^ルぬ事^ヲふ^ク世^ニ小^シハ彼^レ疎^シび荒^ビ来^ル物^ノ曲^ヲ
 説^ク小^シ相^ノ交^ハこ^リ相^ノ口^ヲ會^フる痴^人も多^ク者^ヲふ^レバ後^ニ世^ニ
 小^シ然^ル曲^ト士^トの又^モ出^ル来^ル此^ノひ^ハとて^テ女^ヲ呵^リ置^ク
 者^ヲふ^ル○當^ニ有^ル國^ト耶^ハ必^ズ當^ル小^シ國^ト有^ルべ^クと^シふ^リ天^ノ神^ノ御^ヲ
 依^ルを奉^テ天^ノ降^リ坐^ルが國^ト土^ハ彼^レ天^ノ霧^ヲ阻^ルれ^テ
 見^エざれ^ドも此^ノ必^ズ當^ル小^シ其^ノ國^ノ有^ルべ^ク所^ヲと^シ天^ノ瓊^ヲ
 矛^ヲ指^下る給^ヘるふ^リ天^ノ孫^降臨^章必^ズ當^ル同^ノ禦^ス又^モ必^ズ
 當^ニ平^ニ安^ニふ^ク同^ノ格^ノ文^ヲふ^レバ此^ノハ當^ニ字^ノ上^ニ
 必^ズ字^ヲ加^ヘて聞^ベき所^ヲふ^リ此^ヲ以^テも此^ノ坐^ニ高^ニ
 と有^ル同^ノ事^ヲふ^テ其^ノ即^天浮^橋當^ニ字^ハ正^ニく正^ニふ^ク
 と云^フ物^ヲふ^ル事^ヲ思^ヒ明^ニ可^ク然^ル有^ルべ^クと^シ決定^スる辞^ヲ
 どの同^ノ語^ヲふ^テ物^ノ事^ノ正^ニく然^ル有^ルべ^クと^シ決定^スる辞^ヲ

△條公神説^ニ書^キ成^ス
 者^ヲ畫^シ海^ヲ成^ス島^也
 と宣^ヘるが如^ク此^ノ説

第四

ふ^リ此^ヲ以^テ二^ノ神^ノ此^ノ時^ノ御^心を想像^ス奉^ル可^ク○畫^ス
 成^公己^ノ上^ニ註^リ十七^下畫^ニ二^ノ神^ノ當^ニ有^ル國^ト宣^ヘる
 ハ此^ノ大^ノ地^ノ全^クを云^フ事^ヲふ^ルを天^ノ瓊^ヲ以^テ畫^シ給^ヘハ礮^ヲ
 馭^ル盧^ノ嶋^先凝^成て初^メ國^ヲ得^給へ^ル即^チ是^ヲふ^リ先^ニ小^シ國^ト
 思^フ不^レく違^ヒて小^シ島^ト
 を畫^シ成^ス給^ヘるふ^リ非^ズ
 ず初^メ其^ノ嶋^ヲ探^得て國^ヲ
 の予^ヲ着^ヲ得^給へ^ルふ^リ
 アル^フミ^ニイ^ハリ^クイ^イザ^ナキ^イサ^ナミ^フタ^ハミ^ラノ^カミ^ロ

一書曰伊弉諾伊弉册二神

相謂曰有物若浮膏其中蓋

○日本書紀傳七

○百六

有國乎乃以天瓊矛探成一

嶋名曰破馭盧嶋

此傳の委アラム、クニハ、ノリタメテノスナハテ、モクニテ、アマノ、ヌ、ホコラ、サグリ、ナシタマフヒトツノハ舊事紀シマラ、ソノチ、イフハ伊弉諾伊弉冊二尊奉詔立於天浮橋之上共計謂有物若浮膏其中蓋有國乎廼以天瓊矛而探之獲見滄海則指下其矛而因畫滄海而引上之時自矛未落岳滴瀝之潮凝結而為嶋名曰破馭盧嶋と有シマラ、ソノチ、イフハ甚能通えたり然れども其大旨正書及第一書ロ、ニ、ミ、ト、ロハ同イフハ故ハ其ハ任イフハ收イフハ

所耳を傳書られたる者あり御紀の例然りと見えて一書曰書とて多き中ハ餘リハ事略たりと思ゆるも以つらざるハ其傳の無ハ非ず何れハ收イフハ事ハ再出されざるふりけりと此傳と右の舊事紀を比較して知イフられたり然れバ此も右の如く長く有イフけハ成イフされたるハ撰者の神イフハ相謂曰ハ相語良比給波心イフハ訓イフハ二神相共與ハ詔給へる所ハて舊事紀ハ共計謂ハ有イフハ同ハ所ハふり何れハ一方よりハ相イフハ相とも共とも云べりぬ男女の互ハ思合て語イフハを万葉九十七ハ相詭良比言成之賀婆十三

二十小見渡尔妹等者立志是方尔吾者立而云々相語
妻遠ふど有も何れよりと無く相共小語合ふ云ふり
但共計謂と云時ハ二神の互こ此ハ云と其ハ云と
とこ言議て言出給ふ事小成て少違へるを相謂曰マ
云時と共小語合給ふ事○有物若浮膏ハ神世七代章弟
六、一書小天地初判有物若葦牙生於空中因此化神號
天常立尊次可美葦牙彦舅尊又有物若浮膏生於空中
因此化神號國常立尊と有る是ふり鈴屋大人も天と
地との分れとる事ハ此傳小て殊小著明く聞えたり
と云れとる寔小然る説小て大地の初の狀鏡小懸て
見るが如く但右の傳を思くと見る時ハ葦牙と浮膏
と共くと空中小成れるが如くふれども

然く葦牙の若くして萌騰り去て天と成れるを浮
膏の如くと云物ハ其残り留まりて地と成べき物ふ
る事云も若て右の有物若浮膏と云物より國常立尊
ハ化出給ひて即其神と坐を此小又二神の有物若浮
膏と宣ひて其中小蓋國有むと其物の主の如く物爲
給へるハ如何と云小此時己小幽頭の差有く故ふり
其ハ古事記小國之常立神次豊雲野神此二柱神亦獨
神成坐而隱身也と有て隱身小て御靈小て渡りて給
ふ耳ふく傳三四の卷く小説るが如く此神等ハ地
上の經營の事ハ係列ハせ給ふ事無くて國常立尊
ハ一歳の公運を司り豊斟淳尊ハ一日の私運を司り

て幽より大地を保護せ御在り坐せば二神の見行り
て有物若浮膏と宣へり時ふも己公運私運の事
ハ有ける事云も更ふり其ハ第一一書ハ小定時日マ
云ハ四神出生章ハ生蛭兒雖
己三歳云ふと云るも全ハ後の事を借神世七代章
前ハ及ぶとて書れとる耳ハ云難く
小國常立尊次國狹植尊次豊斟淳尊允三神矣と有て
此三神ハ一列の神ハ坐せば彼有物若浮膏と有物ハ
因て化坐る神等ハ坐事ハ今云限ハ非るを次ハ溼
土真尊汝土真尊より此二神ハ至る迄ハ猶代々の神
と有り然るハ二神の此ハ有物若浮膏と宣へり
とを以見れば未溼土汝土も非り間の事ハ正書

小底下豈無國歟迺以天之瓊矛探之是獲滄溟と有を
上ハ引る舊事紀ハ有物若浮膏其中蓋有國乎迺以
天瓊矛而探之獲是滄海と有て滄海も若浮膏と云物
を探りて漸ハ成れる計ふれば二神より以前ハ溼土
汝土ふとを以御名ハ負坐べし神の御在り事知
べし其も神名ふとを後より押當ハ称奉るハこゝ有
め皆彼大倭國者以行事負名國也と云ふ上世の風儀
を以て思ふ可ふ借右の如く若浮膏と云物を
以て探給ひハ始りて是ハ
滄海ハ出来れる其ハ矛の金氣より締りて溼と成
り汝と成て水と土と分れとるハ依て溼汝ハ沈み水
ハ浮る故ハ滄とを察ふ可く然れば此一書の傳ハ溼
海原の出来しを察ふ可く

△神功皇后御紀
小使吾岳海人
鳥麻子呂出於西
海今察有國耶
云々還之曰西北有
山帶雲橫、經蓋
有國乎と有か思
唯らて曉る可
し但二神のハ上よ
下を曉見坐るか
り右あふハ横か地
上を見渡すあり
思惑ふ可うらす
儲蓋の例ハ寶
劍出現音十第ハ
一書ハ是談也蓋
有山深之致焉
又具可與吾共
理天下者蓋有
之乎

土煮尊沙土煮尊より以下次く小成坐る神ハ伊弉
諾伊弉册二神の有物若浮膏と宣へり始より國の
面と神の身と備り足ひ坐る其運小依て負坐る時
の御名ふる事を徴了確證と成る傳かて又上の三神
の隱身と此の二神の頭身ふると其差別甚分明く
曉得べき文ふりう此ハ又右ハ引る舊事紀を合す
れハ其時の狀正目ハ今見るガ
如く立返りて傳五卷ハ其神
名を説明せるを見合せてよ○其中蓋有國乎ハ正書
舊事
ハ底 下豈無國歟と慷慨して反語を用給へるを此
ハ唯有ハ國有ハハ故ハ蓋ハハ云宣へるふり儲蓋の例ハ天孫降臨章ハ高皇
産靈尊見其矢曰云々蓋與國神相戰而然歟と有て物

△三田小南雀公鳥
蓋哉鳴之三田ハ
山主者蓋雖有又
四甲過往人ハ蓋相
武鴨四甲ハ蓋毛
之中言聞可也又
八情蓋夢所見
才ハ又五ハ蓋從門
將返却可聞七ハ
小蓋毛琴之下極
尔十五ハハ和我
世故之氣大之麻
可良遊女十七ハハ
氣大之久毛也
布許等ハハ也
等十八ハハ氣太
之役奈加須ふと
猶

を太抵ハ量りて判る辞ふり言義ハ彼慥ケレふる可く此
語万葉余多通證ハ蓋氣出也發語辞と有ハ如何予
ガ彼慥と云ハ彼ハ慥ハ其ハ心ハ判る
意ふり名義抄ハハ蓋字
を意富年祿とる訓たり○探成ハ滄海を探りて一嶋
檀ハ蓋慎詰と堵ハ蓋行不也ハ檀及堂據也獲是滄
海則指下其元而因書海而引上之時自ハ未落無滴
瀝之潮凝結而為嶋云々と有を約めて探之より為島
迄の文を採成の二字ハ持せたる所ふり但舊事紀ハ
同ハ傳ふる
ガ精ハさハ茂さとの差有を知せむとて今引出たる
小ころハ有けれ正ハ此の正書ハ探之是獲滄溟
其矛鋒滴瀝之潮凝ハ一島と出たハ其委らさ傳ハ
其ハ譲りて此ハハ二神の有物若浮膏と宣へり一神
言を專要と傳
られたるふり

アル フミニ イハク ロ ヒメ ガミ マツ ノリ タメキ アナニ エヤ エ
 一書曰陰神先唱曰美哉善
ヲト コヲト コトキ タメシ ヒメ ガミ ノ サキ タチ コト ユエニ オモホ ヒテ アサ
 少男時以陰神先言故為不
ハズト サラニ マタ マフタメ シ リ タ メ フ ト キ ニ ヒコ ガミ マツ ノ リ タ マ ヒテ
 祥更復改巡則陽神先唱曰
アナニ エヤ エ ヲト メ ヲ ト ロ ツ ヒ ニ オ モ ホ シ ミ ア ヒ マ サ ム ト ミ カ ド モ ガ リ キ
 美哉善少女遂將合交而不
シ ロ メ サ ッ ノ ノ リ ラ ロ コ ニ タ リ シ カ バ ニ ハ ク ナ ブ リ ト ビ キ テ タ キ ソ ノ
 知其術時有鵲鳩飛來搖其

ラ カ シ ラ ラ フ タ ハ エ ラ ノ カ ミ ミ ソ ナ シ テ マ ア ビ テ ソ レ ニ ス ナ ハ チ エ タ マ ヒ キ ト ツ ギ ノ
 首尾二神見而學之即得交
ミ ナ ハ ラ 道

陰神先唱曰云々陽神先唱曰云々と各其旁を擧て一
 を省るハ正書の例不倣へるふり陽神後和曰云々陰
 神後和曰云々其旁を加へて聞く時ハ其唱和の御
 事甚く明くけし允て御紀ハ同ハ事の重複れる時
 外不讓合不例ふれ省ても聞ゆる限ハ成たけ畧きて
 不耳泥む時ハ大不意を矢かり○美哉ハ第一一書不
 妍哉此云阿那而惠夜と有る其と同づく訓べき事云

も更ふり美字紀中可美も麗美麗美も用ひて此も
 其意小て神武天皇御紀小大醜乎老父老嫗有て老
 人の貌の醜小對ひて若き男女の狀の美ハさを
 美哉ハ云べ古語ふり右大醜此云鞅奈弥你句
一書天孫謂姉為醜不御而麗妹有國色引而幸之
見えたる妹有國色を其正書小有美人名曰鹿葦津
姫と有て美と醜と對ハセたるを以此の美或も大醜
の反ふる事を知べく尚傳六意或又此卷の妍哉の下
小云るを見合す可く又字書小妍字をバ
麗也とも美好也とも註セるを思ふ可く○善少男の
 善亦第一一書小可愛此云哀と註セるが如く哀と訓
 べき所ふり其説ハ己云り傳六卷六十九下○先言ハ正書
小陽神不悦曰吾是男子理當先唱如何婦人先言乎云

△右の合交を舊事
紀の合交有り

第一一書小天神以太占云く教曰婦人之辞其已先
 揚乎ふど見えたる是ふり古事記も女人先言不良
知故尔○遂將合交而ハ遂尔御合坐武登思保斯く
加抄毛と訓べく合交ハ交合の字を倒反セる小て其
 意同く男女の娶ふ事を云るふり四神出生章弟二
智娶植山姫生推産靈と有る古事記小此の事を於是
娶字を阿布と訓る是ふり△古事記小此の事を於是
 伊邪那岐命先言云く後妹伊邪那美命言云く如此言
 竟而御合生子淡道之穗之狭別島云くと見えたるハ
 此の合交と同く又將嫁大巳牟遲神とも須勢理毘賣
 出見爲目合而相婚云くとも又沼河北賣を婚給へる

全續紀第7話小伊波
乃比吉賣命皇后止御
相坐命有り

所小故其夜者不合而明日夜為御合也とも見えたり
御ハ崇いて申せる言ふり通證美阿波須身合也
娶る事を唯小阿布とも云れ此ハ美斗能麻具波比
ふどの身小當る美とハ異先小弟一書小既遇
之時の遇ハ行合たる此ハ合ハ別其語も意
も同トウウハ合ハ合ハ別〇不知其術ハ二
神の御合交坐ひと為小指當りて其為べき様を知者
ざり〇ふり正書小思欲以吾身元處合汝身之元處弟
一書小思欲以吾身陽元合汝身之陰元と有ガ如く
各其元處を合セ給ふ事ハ元より交小契聞え交し給
ふれば其事ハ知者ごる非れども其熟く昨合不狀
迄ハ御心を寄給ハざりしが時も鶴鶴の飛来て

其首尾を揺し居たるを見て其如く成バヤと思ふ
成ぬるふれば不知其術ハ文を綴る地より云る詞
ふり軽く見て有ぬ可く誰も此ハ深くカを入て見
の間小生と活る物の自然の情ふれハ虫類の界
人小於てを況て神ハ於てを待小非テ況て
思ふ事ハ有れども二神の其術を知者ざり〇故
小師を鳥ハ未給ふ非ず合交の事を如何ハ為バウ
と思ひし時も其ハ在合たる鳥の首尾を揺ウセ
るガ御目ハ留術字を美知と訓來れる事ハ有れど
も下小交道と有ハ復りて如何ハふり名義抄ハ術字を
能理と訓る其ハ從ふ可〇宝劔出現章第六一書小療
病之方又禁厭之法ふど有る方法の字共と同一意味

△金澤水の登都
岐表志問理と
し亦波久那史
理とし訓り

今字鏡の鶴豆方
奈柱と有を名義
抄の鶴と亦波
久奈布里の訓を
以て命心鶴の名
ふ事知らる△
△本草和名鶴鶴
天鶴一名連鶴一名
鶴一名鉄母和奈
波奈布利と有り通
證の男女相戲目奈
奈天留亦此意と云
る然も有ふむらり
葉十五卷三十九下
小佐須太氣能大
宮人看伊麻毛可母比等奈史理能未許能美多流良武と有る奈史理是あり彌字を奈史流と云も其意あり

△又續古事談上
小傳大納言立て
無不程の冠浴
ふけり人の嘆嘆
ある小廣情の
大臣嘲うれける
を聞て此大納
言何事を云ふ
事をハ久奈加礼
てと云れたりけ
る云ことも有り
又和玉篇の鶴
かも鶴の伊志
久那波と有る
久那波と右の
同と又伊志多
伎も有り

常のも方術とも法術とも熟て用ふる字ふり
ひが宜くりる可き又和邪○鶴鶴和名抄の和名尔波
久奈布里私記曰止豆木乎之閑止里と見えて名義抄
の訓も此の同と又釋紀秘訓の鶴鶴尔波久奈布里又
止豆木乎之閑止里とも止豆木止里とも都く那波世
杵理とも都く麻那婆斯羅とも訓べき五説有り右の
△又同撰金娘の訓告事記朝倉小麻那婆斯羅と有る
等しき名ふりる神代紀口訣ハ又云縮負鳥の如り
此鳥の若る時ハ當りて出来る事ハも天神の頭ハ
給へるハて此も太右の類ふる事此卷の七十三下
ハ己註ル波ハ庭ハて二神の合交坐じと為る場ハ
如く註ル波ハ庭ハて二神の合交坐じと為る場ハ

り天孫降臨章第二一書ハ齋庭と有ハ齋場の義神武
天皇御紀ハ靈時と有る祭場の義ふるを思合す可く
久奈ハ日本靈異記ハ天皇與后寢大安殿婚合之時と
有る婚合を久奈加比と訓るを猶字鏡集ハ婚字を久
奈久とも麻久とも登都具とも都留夫とも訓るを以
思ふハ久奈ハ組成ハて夫婦の婚と形を云ふり然れ
ハ尔波久奈布里ハ二神の合交坐じと為給へる場ハ
ふて其組成テ風を爲し由ハて文ハ揺其首尾と有る
是ふり傳六三十四下ハ註る如く美斗能麻具波比ハ與身
之熟組合あるハ思合せて曉る可くハ因ハ云久奈加比ハ
組成合ある可く

△金澤水の登都
政表志問理と
し久波久那史
理とし訓り

△字鏡の鶴豆方
奈柱と有る名義
抄の鶴と久波
久奈布里の訓り
△天鷲一名連錢一名
鶴一名鐵母和名
波奈布利と有る連
證の男女相戲目奈
奈天留亦此意と云
る然も有るひひひひ
葉十五卷三十九下
ハ佐須太氣能大
字人者伊伊毛可母比等奈史理能未許能美多流良武と有る奈史理是なり鶴字を奈史流と云も其意なり

△又續古事談上
小傳大納言立て
舞不程の冠が浴
小けり人の嘆嘆
ある小廣備の
大臣嘲うれける
を聞て此大納
言何事を云ふ
事をハ久奈加比
と云れりけり
る云こと有る
又和玉篇の訓り
ハ鶴ハ伊志
久那波と有る
久那波と有る
同ハ伊志多
ハ伎と有る

常ハ方術と法術と熟して用ふる字ふり
ひび宜く可き又又和和邪邪 ○鶴鶴和和名名波波
久奈布里私記曰止豆木字之閑止里と見えて名義抄
の訓も此ハ同ト又釋紀秘訓ハ鶴鶴波波久奈布里ハ
止豆木字之閑止里と止豆木止里と都都那波世
柀理と都都麻那婆斯羅と訓べ五説有右右の
都都麻那婆斯羅ハ古事記朝倉小麻那婆斯羅と有ふ
等し名ふり各神代紀口訣ハ又云縮負鳥ハ如り
此鳥の若る時ハ當りて出来る事ハも天神の頭ハ
給へるハ此も太右の類ハ事ハ此卷の七十三下
ハ己ハ註ル波ハ庭ハ二神の合交坐ハと為る場ハ
如く註ル波ハ庭ハ二神の合交坐ハと為る場ハ

り天孫降臨章第二一書小齋庭と有ハ齋場の義神武
天皇御紀小靈時と有も祭場の義ふるを思合す可
久奈ハ日本靈異記小天皇與后寢大安殿婚合之時
有る婚合を久奈加比と訓る猶字鏡集小婚字を久
奈久とも麻久とも登都具とも都留夫とも訓るを以
思ふ小久奈ハ組成ハ夫婦の婚ハ形ハを云ふハ然れ
ハ尔波久奈布里ハ二神の合交坐ハと為給へる場ハ
ふて其組成ハ風を為し由ハて文ハ揺其首尾と有る
是ハふり傳六三四下ハ註る如く美斗能麻具波比ハ與身
之熟組合ハ思合ハて曉る可ハ因ハ云ハ久奈加比ハ
組成ハ合ハる可

△夫婦枕を同じく
て打寝し事あり釋
秘訓小取字を私
記曰問娶字訓萬
久其義如何皆男
女會合之時正道
体不能嫁娶由機
△名抄不學尾の二
字を都留美訓に
和名抄小抄
尾尚書鳥獸章
尾孔女國注云他
日華文接曰尾
接俗云
都流比と有り
△八金澤本の訓
と然り私記ハ
此小止豆岐万奈比
止利又云止豆岐字
志開止利と云
訓有り一ハ字と
云ハ一ハ教と云
別たも有り

△八金澤本の訓
と然り私記ハ
此小止豆岐万奈比
止利又云止豆岐字
志開止利と云
訓有り一ハ字と
云ハ一ハ教と云
別たも有り

く久奈久ハ組成候ふる可く麻久ハ古事記沼河比賣
歌小麻多麻傳多麻傳佐斯麻紀岐毛ハ那賀伊波那
佐年云々須勢理毘賣命歌ハ麻多麻傳多麻傳佐斯
麻岐毛ハ那賀伊波那世云々有る麻久ハ組
同儀ふり登都具の事ハ次云々都留夫ハ聯身
心て身と身と聯り合事を云ふり太秦牛祭文ハ加波
都留美々出たり今も鳥獸の婚 ○止豆木乎之閉止里
ぐを都留年と云事常か多し
の止豆木ハ此小交字を然訓ませ其を舊事紀ハ交通
と作り其ハ下ふる^得交道の下小云べし乎之閉^止ハ二
神の其を見て交道を學ハしつ小依れる名あり文ハ
二神見而學之と有を以知べし又止豆木止里と有も
右小同^レ此鳥の首尾を揺がせる狀の何時も交合す
るふ似たる故の名ふり故乎之閉と云語ハ
△八金澤本の訓
と然り私記ハ
此小止豆岐万奈比
止利又云止豆岐字
志開止利と云
訓有り一ハ字と
云ハ一ハ教と云
別たも有り

見ゆ

△地を都々と
云ハ古事記白
檮原宮段ハ阿
米都くと有ハ
地天地の義ハ
を合せて曉
可

鹽土老翁を鹽筒老翁又古事記^{白檮原宮段} 歌小阿米都
と有も天地ふるを明しむ可く那波世ハ隱^{トハ}爲ふて隱^{トハ}
處の中ふて爲す由ふて其ハ交合ふる事云も更ふり
天武天皇御紀ハ到隱郡禁隱驛家と有を下小九月己
丑朔己亥宿名張と有を以て隱字の訓を知べし^{然れ}
那波世登理とハ二神の此大地ふて初て夫婦寢^都
身屋を建て其中ふて合交坐す業を成る由ふる可く
思ハ都ハ麻那婆斯良ハ地學柱ふり麻那婆志良ハ鈴
屋大人説小天柱を行廻しつて夫婦^{ミト}邁合し給ふ事を
學バセ給へる意ハ取て號たるふる可き由ハ云れし
るハ然る言ふり次小學之即得交道と有れハ其實ハ

△夫婦枕を向く
て折られた事あり
秘訓小取字を私
記曰問娶字訓萬
久其義如何答男
女會合之時正直
体不能嫁娶由携

△金澤本の訓
と然り私記ハ
此小止豆故万奈比
止利又云止豆故字
志閉止利と云ニ
尾尚書鳥獸章
尾孔安國注云化
日華文接日尾
接俗云
都流比と有り

△地を都と
云ハ古事記白
橋原宮段ハ阿
米都と有りハ
天地の義カ
を合せて曉
可

其畧
其畧

く久奈久ハ組成交ふる可く麻久ハ古事記沼河比賣
歌小麻多麻傳多麻傳佐斯麻紀岐毛ハ那賀伊波那
佐牟云々須勢理毘賣命歌ハ麻多麻傳多麻傳佐斯
麻岐毛ハ那賀伊波那斯那世云々有る麻久ハ組
同儀ふり登都具の事ハ次云々都留夫ハ聯身
心て身と身と聯り合事を云ふり大秦牛祭文ハ加波
都留美と出たり今も鳥獸の婚
ぐを都留牟と云事常か多
の止豆木ハ此小交字を然訓ませ其を舊事紀ハ交通
と作り其ハ下ふる^得交道の下小云べし乎之閑^止ハ二
神の其を見て交道を學ハしつ小依れる名あり文小
二神見而學之と有を以知べし又止豆木止里と有も
右小同ト^{此鳥の首尾を揺がせる狀の何時も交合す}
省りても其^{るふ似たる故の名ふり故乎之閑と云語ハ}
義聞ゆめり○都ハ那波世登理^の都ハ大地を云り

鹽土老翁を鹽筒老翁又古事記^{白橋原}宮段 歌小阿米都
と有も天地ふるを明しむ可く那波世ハ隱^ハ爲ふて隱^ハ
處の中ふて爲^ハす由ふて其ハ交合ふる事云も更ふり
天武天皇御紀ハ到隱郡焚隱驛家と有を下小九月己
丑朔己亥宿名張と有を以て隱字の訓を知べし^{然レ}
那波世登理とハ二神の此大地^ハ初て夫婦^ハ寝る
身屋を建て其中ふて合交坐す業を成る由ふる可く
思^カ○都ハ麻那婆斯^ハ良ハ地學柱ふり麻那婆志良ハ鈴
屋大人説小天柱を行廻しつて夫婦^ハ邁合し給ふ事を
學バセ給へる意小取て號たるふる可き由小云れし
るハ然る言ふり次小學之即得交道と有れハ其實小

然る可く記傳四十二字鏡小鴨弥左古又万奈柱又
と皆詳ふ者ふ者と有り今考る小鴨ハ鴨鳩ひて男女の
親い厚き者ふる故小漢籍詩經小鴨ハ鴨鳩ひて男女の
れじも此ハ其義ふ取て万奈柱と云ふハ子好速と出た水
鳥ふて鶴鳩の一種と通えたり鳩ハ天孫降臨章小以
鴉為ア者と有其小文徳天皇実録小魚虎鳥と云る
者ふる俗小川蟬と云て此も鶴鳩の属ふる事其形
以て知るが俗小川蟬と云て此も鶴鳩の属ふる事其形
ハ類聚名義抄小一名鶴鷄とも帝鷄とも鷄鷄とも作
てふ波久奈布里と有れハ素より鶴鷄とも鷄鷄とも作
婆志良と云けひを又都ハ麻那婆志良とも云ふり
り古事記宮段天皇の大御歌小毛と志紀能淤富美夜
此登波宇豆良登理比禮登理加氣氏麻那婆志良袁由
岐阿閑尔波須受米宇受須麻理韋氏云くと謡ハせ給
へる共を天語歌とも云ハ此の故事の天上い傳ハ

り来て彼天皇の日継の古語小在を取て御製衣坐る小
依れる名ふる事己小中臣壽詞講義弟條小註せる小
如く謂之神語也と有る神の御言として語傳へたる
由ふれバ此二共小語字を加多理と訓べき事己小古
史徴小註されたるが如く姓氏録小天語連と有ハ天
津神世の故事を語傳ふる由の名小大嘗祭の語部
の本ふる事其講義小註せるを又宝鏡開始章天日鷲
命の傳小右の上三句ハ百敷之大宮人者鷄鳥領巾取
云べく掛而ふて記傳四十二丁小契冲が説を擧て其注小
此鳥項より胸係て白斑有り領巾掛たる狀其小不
似たりけむと有ハ然る言ふて此豊樂の場小侍くへ
る大宮人の狀を宣へるふれども此を天語歌と云上

神世の故事と今の事実と打合せたる御言ふり此
 を此小及ぶして考ふる小ニ神の夫婦邁合し給ふ時己
 く此禮ふどの御装束の物も何も整成て有る證とも
 成べく其上ニ化作の傳ふ述たる如く此より前
 小陽神問陰神曰汝身有何成耶と宣ひ係たるも其御
 装束の御衣小褰よれて其御陰處ふどの隠れたり
 邊ハ頭ハ小見えざりしが故ふる事云も更ふり皇太
儀式帳小生絹御比禮ハ端云々外宮儀式帳小も生絶
比禮四具云々有て上古小貴き御方の服ありしが
其即ニ神の古小始ま 麻那婆志良ハ此の鶴鴿ふり哀
れる事を見つ可く 由伎阿閑ハ記傳云れたるが如く小尾行令合ふて群居る尾共の並べ

るを云れば即ニ神の相並びて御殿オトリノミ隠しせる状小合
 り尔波須受米の下小如字を加へて心得べく宇受須
 麻理韋氏ハ記傳小群統居而云々ふて宮人の群り集居る
 事を詠せ給へる小ハ有れども此のニ神の八尋殿小
 群統り御在し事を取せ給へるふて是迄ハ神世の
 故事小て夫婦邁合し給へる時の状を此小宮人を侍
 ハせ給ひて酒宴し給ふ事小引附て可笑しく謠成し
 給へるが甚しく興小ハ成たり者ふり此ハ記
を用ひふが其取方大小異ふり猶此ハ天語歌とて
三首の中ハ三重嫁カ歌小阿理岐奴能美幣能古賀佐
ハ賀世流美豆多麻宇岐尔宇岐志阿丈夫良淑知那豆佐
比美那許袁呂しし尔云々と詠るハ淳膏の事と彼

△又此小出たる天語歌
 三首共小結句小許登
 能加多理甚登母許
 哀婆と有ハ何れ神
 世の故事を
 本立として今ハの事
 を諷はせる事ふり
 此を以て彼記のハチ
 予神沼河比賣娘
 勢理思賣命かや
 の歌を神語と云
 るを思合す可き者
 あり

礮取盧島の成れる事とを取合せたる者ふる事傳四
 卷廿一丁百一丁の所小且と云るが如く又其次ふる
 大后の御歌小比那開夜々游斐陀氏流波昆呂由都
 麻都婆岐曾能波能比呂理伊麻志曾能波那氏理伊麻
 須多加比加流比能美古と詠セ給へるハ日神の御生
 坐る神故事を用ひ給へる小て共小天語の故事ふる者
 り○稻負鳥ハ神代紀口訣小又云稻負鳥と見えたり
 稻ハ借字小て寢ふる可く例ハ万葉十六丁小屋所經
 稻寸丁女蚊妻問迹と有て稻寸ハ爲寢ふり負ハ令負
 小て名義ハ二神の夫婦違合く給ふ場小在て其首尾
 を揺せるが二神の御心小留りて其如く行給へる唯
 假初の事小起りて婚教鳥とも學柱とも事こく名
 小負るを以て寢令負鳥イナガアセトリと其鳥小小號けたるふめり

又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと

通證小引る和泉式部集逢ふ事世中稻負鳥の無りせば
 人を戀路小迷ハましやいと有を以ても口訣の説の
 信ハるくふり右の人を戀路と云小泥を云掛たり記
 小泥小て土と水と相着りて在る物小て和名抄小泥
 和名比知利百一云古比千と見え後世歌小多く恋
 路を云掛たりと云れとる是ふり又此鳥の水涯か
 小馴住ふ者ふれバ泥小寄て詠る事甚詔れ有と云べ
 小出二神の始て礮取盧島を探得坐く程ハ泥と汝の
 出来れる始ふれバ葺ふどの生たるくびを鶺鴒の其
 小成出て住ひ事甚て叶へる者ふり傳五卷の初小
 云事共を合せ讀て其味を知る可く又泥土奠尊汝
 土奠尊岸嶺尊活嶺尊ふで申すも二神の此時小至る
 迄の神功の狀小依て負坐る御名ふりし事をも愈以
 可し○又庭多々伎と云名の仲正集小出たるも次て
 古傳ふる可く思ゆ其古事記沼河北賣歌小多久豆

又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと
 又卷二十七ふと

△絶体天皇七年
御紀皇太子御
歌小摩左桑
運四羅多：金阿
藏播梨と有
も右小同トき由
傳三十九百四注
ら加一備彼
記の

怒能斯路岐多陀牟岐阿和由岐能加夜流牟泥遠曾
陀多伎多々伎麻那我理麻多麻傳多麻傳佐斯麻伎毛
毛那賀迹伊波那佐牟遠云々復勢理毘賣命御歌ふも
阿和由岐能加夜流牟泥遠多久豆怒能斯路岐多陀
牟岐曾陀多岐多々岐麻那賀理麻多麻傳多麻傳佐斯
麻岐毛々那賀迹伊遠斯那世云々如此同ト事を二
柱共小詠給へるハ二神の夫婦違合ト給へりト時の
故事を用給へりト事決ト下小此謂之神語ト有も神
代の内小ても神世七代ト云る遠き神語を以て詠セ
給へるふ由れり古事記の右の御歌共の末小許登能

迦多理基登母許遠婆と結めたるハ古き神語を本
て自の御事を詠セ給へるふり
其ハ此時の八千
麻波勢豆加此許登能加多理基登母許遠婆と有ハ沼
河比賣を婚ひ坐ふ二神の唱和の意を合きて妍哉ふ
と謠給へる小依と佐加志賣遠云々久波志賣遠云々
小同トく阿麻波勢豆加比云々河比賣の歌の中間
史徴小も辨く阿麻波勢豆加比云々河比賣の歌の中間
て一首ふるが其結小許登能迦多理基登母許遠婆と
有ハ此の本文小引る如く夫婦違合の状を云々以續け
たれバふり次小大國主神の御歌の結ふも右の如く
有ハ依て二神の故事ふもやと探る小是ハ然
せる節も無れとも御歌の中小蘇迹柺理能云々ト引
御句有り日本紀私記小鷓曾尔と有る其ふて止小引
る字鏡小鷓を万奈柱と有る取せ給へるが故ふり須
勢理毘賣命のハ沼河比賣も同トけれハ本より然結
めさせ給へる事ふり然れバ神語も天語も同ト右の
事ふて上代の故事小依て自の事を詠を云ふり右の

○日本書紀傳七

○百十九

△遊仙空屈の拍
 榎坂の房間と
 有り
 △傳六行云云如く
 今も淡路の磯取屋
 島の地方に鶴鴉島
 云云有り其六趾が
 可く倍此

二歌を今日易く記し見む如栲布白腕如沫雪弱然
 胸子其手抱叩拱在真玉乎手差枕股長尔寢者將宿
 と云義ふるを以思ふ不庭多々伎ハ庭手叩叩て彼揺
 其首尾と有る状小依れる亦名ふりけり又體天皇
 兄皇子親躬春日皇女乃口唱曰云々伊慕我堤鳴倭例
 你魔柯紀每倭我堤鳴伊慕你魔柯絶每磨左棄逗囉
 多々企阿藏播梨と有ハ右の八千神と沼河比賣と
 の歌を取合せ給へる右ハ妹ガ手を吾ハ枕
 の吾手をバ妹ハ枕ハめハ薜荔葛の如く多々企阿藏播
 利ハて手叩キ糾ハリ云々爲る事不レ此ハ上ハ同ト
 ○揺其首尾ハ首尾ハ袁加志良と訓べ揺字釋紀秘
 訓小字加須とも又多々久とも讀て江家説同之と有
 れバ古より兩訓有けるふり名義抄の訓の中ハ字基

加須又布流布とも訓る皆其義相近きを今ハ多々久
 と云ふハ右ハ庭多々伎の下ハ古事記書を引て徴せる如
 く此の事實ハ合へれば今其を正訓と定め釋小字
 と作ルハ音便ハて宜うハズ今も鶴鴉の状を見小
 其首尾を振ハひ動クすハよりハ多々久ハ云状ハ近クり
 後世水鷄ふじの歌ハ多々久ハ○學之の學ハ鶴鴉の
 云も又似たる状ハ以て云ふり
 此場ハて組成ハ風を爲るを真似ハ給へりハ由ハて
 其名を止豆木乎之閑止里と云ふ對へて其受給ハ方
 不附て云初たる語ハて太占ハの占も同ト事ハふり其麻
 迹の麻ハ真字の意ハて其指す所の物を立て其ハ似
 て出るを我心ハ合する由ふるが學も其不同トと云

ハ其鳥の首尾を揺くを真と云て其如くして交ぎ給へる故小此も真似ふるを寧波牟寧師天ふど下ふて辞の活く故小音の轉れる故小麻那師天とてハ云れ占三の意小又違ハざるふり本小寧を那良比兵と訓る其ハ應神天皇十六年御紀小習諸典籍と有て其も寧ぶと同ト事ふれども此ハ麻那師天の方然る可く名義枚小寧字麻那師天の外小那良布又袁志布又物奈良布此ハ麻祿久ふど種く訓りき此ハ決く天神の御方より二神の御目小當る可く顕示し給へる由ハ豫て太占を以てト合給ふ可く事教給へる故小鳥小然る心ハ無れども二神の是が天神の御教と受賜りして始て夫婦違合し給へる故小寧之ハ傳へたるふり

△松浦 と云ハ伊勢人して壯年の時より殿夷の地を開く

心有て度々往來へる人多し其筆記の其夷人の云傳ふる古説を書せり其事を首師唯滄海海の就て云り口訣小神見鶴鶴て國と云物と無く人云者之徒自然之義也存者も元より非りけり何時と無く海底より何と名狀し難し一物疑門して完神のけり長世を経る圖ひて若も鳥小託つけて顯示し給ひ

小合曉り給ふふれば凡も云め此大神等の御上給へる者ふりけり通證物皆然河出圖洛出書龍而後八卦九疇成馬與龜之感耳關甲子曰聖人師別傳曰役鳥獸以通靈一浴中之書神禹志其為龜の鶴鶴も其鳥たる事を○得交道ハ舊事紀小得

當上林真人神史

○日本書紀傳七

○百二十一

ハ其鳥の首尾を揺くを真と云て其如くして交ぎ給へる故小此も真似ふるを學婆牟學（天）下（下）て辞の活く故小音の轉れるが故小麻那（天）佈（天）ところハ云れ占の意小又違ハざるふり本小學を那良比兵と訓る其ハ應神天皇十六年御紀小習諸典籍と有て其も學ぶ（同）事（外）ハ此ハ麻那（天）佈（天）の方然る可く名義抄小學字麻那（天）佈（天）の外小那良布又袁志布又物奈良布（天）此ハ決く天神の御方より麻那（天）佈（天）久ふと種（天）訓り（天）此ハ決く天神の御方より二神の御目小當る可く顯示し給へる由ハ豫て太占を以てト合給ふ可く事教給へるが故小鳥小然る心ハ無れども二神の是が天神の御教と受賜りしして始て夫婦（天）遵合し給へる故小學之（天）ハ傳へたるふり

△松浦

と云ハ伊勢人にて壯年の時より蝦夷の地を開く心有て度々往來へる人あり其筆記の其夷人の云傳ふる古説を著せし事首（天）唯滄海（天）傳（天）ふり就て國と云物と無く人（天）云（天）者（天）之（天）從（天）自（天）然（天）之（天）義（天）也（天）住（天）者（天）も元より非りけり何時と無く海底より何とも名狀し難き一物疑固りて突神の御方良世を経る（天）心（天）若（天）も鳥小託つけて顯示し給ひ

岳の形を成けり其時國とも無く造島神（天）此（天）上（天）降臨して住給へる時（天）續（天）ちて婦神（天）神（天）也（天）五粒の雲（天）來（天）て降給へる其來給へる雲の黒きを海（天）投入（天）て巖（天）成（天）も云め此大神等の御上雲を海（天）投入（天）て巖（天）成（天）の種（天）類（天）成（天）れと宣ひ龍（天）龍（天）を（天）草木（天）の類（天）成（天）れと宣ひ（天）金銀財帛珠（天）物（天）皆（天）然（天）河出圖洛出書龍成れは祈給ふ時（天）何（天）意（天）無（天）く（天）鳩（天）飛（天）來（天）りて彼二神の御前（天）て受給ふ事（天）臨（天）成（天）れと宣ひ三神（天）其（天）行（天）を得（天）國（天）工（天）万（天）物（天）を（天）悉（天）造（天）成（天）給（天）終（天）天（天）意（天）指（天）去（天）給ふと云所（天）以（天）鴉（天）を（天）送（天）牟（天）伊（天）知（天）迦（天）布（天）伊（天）知（天）神（天）と云言知迦布（天）島（天）と云（天）事（天）造島神（天）代（天）神（天）也（天）此（天）島（天）○得交道（天）公（天）舊（天）事（天）紀（天）小（天）得

○百二十一

島人此鳥を見り時（天）是（天）く（天）尊（天）故（天）事（天）と云む俗又其一の島根と云ハ飛利明天皇五年御紀の謂ゆる後方羊蹄岳（天）よ（天）して（天）實（天）此（天）一（天）島（天）の（天）父（天）母（天）と云者（天）多（天）り（天）皇國（天）の（天）富（天）土（天）峯（天）小（天）似（天）て（天）四（天）時（天）其（天）積（天）雪（天）の（天）絶（天）る（天）間（天）無（天）し（天）上（天）ハ（天）大（天）池（天）有（天）て（天）神（天）靈（天）帝（天）小（天）此（天）住（天）給（天）昔（天）ハ（天）島（天）人（天）皆（天）此（天）上（天）項（天）登（天）り（天）て（天）故（天）帛（天）を（天）捧（天）け（天）解（天）除（天）を（天）致（天）せ（天）る（天）風（天）俗（天）乱（天）れ（天）て（天）神（天）意（天）小（天）此（天）月（天）き（天）神（天）の（天）怒（天）を（天）怖（天）れ（天）て（天）上（天）る（天）者（天）一（天）人（天）も（天）無（天）し（天）と云（天）云（天）ハ（天）有（天）り（天）我（天）古（天）傳（天）を（天）彼（天）が（天）事（天）あり（天）て（天）云（天）る（天）者（天）多（天）ら（天）決（天）め（天）て（天）由（天）有（天）け（天）た（天）る（天）事（天）其（天）多（天）ら（天）

其鳥の首尾を揺くを真と云て其如くして交ぎ給
渡牟寧^天布^天ふと下ふて辞
小麻那^天布^天とてころハ云れ
小寧を那良比兵と訓る
ハ應神天皇十六年御紀
と同ト事ふれども此ハ
小寧字麻那^天布^天の外小那
ハ決く天神の御方より
給へる由ハ豫て太占
へるガ故小鳥小然る心
の御教と受賜りてして
學之ハ傳へたるふり
に於て上段の書來入人なるは其神等其具更人の事
に於てハ其神等其具更人の事

私記の上段
須流美知遠
志信太利と有
四季物語一
登都改乃美知
目^比知ぬ^知まき
童部をアロて云
くと云り三代
實録三代尚侍

御方より鳥小然る心
の御教と受賜りてして

此事己小第一一書太占 小就て云り口訣小神見鶴鶴
而學之從自然之義也と有ハ似たる事ふが此ハ天
神の御方よりも御心有て鳥小託^カつけて顕示給ひ
二神の御方ふても是ころとト合曉り給ふふれバ允
人ふどの為むころハ自然とも云め此大神等の御上
ふてハ當小然べと者と思取給へる者ふりけり通證
而寧於鳥豈其偶然乎道之於物皆然河出圖洛出書龍
馬神鳥非自知者有伏羲禹王而後八卦疇成馬與龜
亦無意義禹豈求而然蓋自然之感耳關甲子曰聖人師
蜂立君臣師蜘蛛立綱罟管輅別傳曰役鳥獸以通靈一
峰子曰河之圖伏羲忘其為馬洛中之書神禹忘其為龜
と云るハ實小然る言ふり此の鶴鶴も其鳥たる事を
打忘させ給ひて天神の御方○得交道ハ舊事紀小得
と載せ受行ハて給へるふり

第一林真人神虫

○日本書紀傳七

○百二十一

ここの標藏開
巻の其女登都
政時子成給心
いふ盛衰記
七の目き日あ合
せむと為けり
を商人の登
都岐の勅當
せられてさ
見え

物の行を事
を扇と云り
重之集の死原
や伏屋の扇く榜
と誰故のうが戒
渡して盛衰記
十五の馬の扇
りむ程ハ足を
救うて止す上
と有り持統天
皇四年御紀憂
不能達云し得通
天朝と首を達と通とを登都具と訓るも此の登都具と本同言さる状あり

交通之術マ作り記傳四十一三十不嫁天登都賀受
氏阿禮マ訓べし鎮火祭祀詞小妹皆二柱嫁継給氏の
嫁継必登都岐マ訓べし和名抄小御齡日本紀私記云
止豆木乎之閉止里神代卷小交道敏達天皇御紀及孝
德天皇御紀小嫁を登都具又女自適人の適トクをも然訓
り以上と有と見えたるが如し字鏡集小婚又名義抄を登都具
と訓たり右の嫁字名義抄小與婆布と訓るハ婿ふり
適小作れる小登都具と有て適ハ其訓非れども然
訓べき所ふり又婿をも婚をも姻をも娶トクを
○然れ松陰と訓得て辨具義連作信事記白傳厚説小
○大具美人之言登妻又身と身と身を接けは謂ふる可し僅六四十丁
ニ通也又男身と身を接けは謂ふる可し僅六四十丁

小註せるが如く美斗能麻具波比ハ共身之熟組合ふ
る可く美刀阿多波志都ハ共身アタス與トキハ當合アタス事
小又登都具の與接トキ小異ふしざるを思ふ可し與トキを唯
登と訓せたるハ我與人ふど云る類是ふり名義抄小
與字を阿多布とも加祢多理とも久美須とも登母那
布とも訓るハ何れも與物トキの義ふるを思ふ可し然れ
ハ男女相接ハる事登都具を云事著明し凡て上古ハ其詞
小潤色無して唯有の任小云故小後世の意を以解べ
るしざる者ふり通證小或説を擧たる小交之為言後
ハ生賢俗意ふり事ハ知る人知て道ハ其當然有べき條理を

今之五徳藏開
卷の具女登都
岐時中成給
セウ買きヨウ合
セむと為ける
を商人の登
都岐の助當
せられてを
見え

物の行を事
を届と云り
章之集お死原
や伏屋お届く傍
と誰故おハ我ハ
渡して盛衰記
十五の馬の届

天朝と有る達をと通をと登都具と訓るも此の登都具と本同言さる故あり

交通之術マ作り記傳四十一三十不嫁天登都賀受
氏阿禮と訓べし鎮火祭祝詞小妹皆二柱嫁継給氏の
嫁継必登都岐と訓べし和名抄小鯽齡日本紀私記云
止豆木乎之閉止里神代卷小文道敏達天皇御紀及孝
徳天皇御紀小嫁を登都具又女自適人の適をも然訓
り以上と有と見えたるが如し字鏡集小婚を登都具
と訓たり右の嫁字名義抄小與婆布と訓るハ婿ふり
嫡小作れる小登都具と有て適ハ其訓非れども然
訓べき所ふり又婿をハ婚をも姻をも娶を交をも
婿をも然訓ミ婿字を加佐祿を儲登都具の名義ハ與
登都具と訓て共小古言ふり接合て男女の身と身を接けは謂ふる可し傳六四十
三丁

小註せるが如く美斗能麻具波比ハ共身之熟組合ふ
る可く美刀阿多波志都ハ共身與アタスて與ハ當合アタス事
小又登都具の與接トミツ小異ふしざるを思不可し與トミを唯
登と訓てたるハ我與人ふど云る類是ふり名義抄小
與字を阿多布とも加祿多理とも久美須とも登母那
布とも訓るハ何れも與物トミエの義ふるを思不可し然れ
ハ男女相接ハる事を登都具云事著明し凡て上古ハ其詞
小潤色無して唯有の任小云故小後世の意を以解べ
るしざる者ふり通證小或説を擧たる小交之為言後
ハ生賢ハく俗意ハふり嗣也夫婦之道廣後嗣為要矣と云る
事ハ知る人ハ知てハ道ハ其當ハ然有ハ條理ハ

云て天下の人の當可依て行ふ事を道と云も此小同
 所以小此小不知其術の術を美知とも訓る其即交
 通を行ふ可き條理を云ふり名義抄小道字不能理
 美知て訓る其同云訓の有を以て術字
 り儲上術を今能理て訓れば此ハ美知と訓り
 一書曰二神合爲夫婦先以
 淡路洲淡洲爲胞生大日本
 豊秋津洲次伊豫洲次筑紫

合爲夫婦ハ正書小共爲夫婦と作ると同ト事合
 と共と字の換れる耳ふれハ舊小從ひて共ハ美斗
 能麻具波比と訓べし其傳上出傳六卷四 ○以淡路
 洲淡洲爲胞ハ甚く異ふる傳ふり其ハ正書以淡路洲
 爲胞と有て第九一書も共小然ハ有れども其す
 小誤れる傳ふる事上小辨へたる如くふるを此ハ

△山陰小先以淡洲為胞生淡路洲子有けむ混れたるもや有むと云れどハ實小然言ふ

△古史微云一書又元集引る小淡洲無し有り

淡路洲淡洲共小並舉たるハ誤ふり其ハ第一一書小先小生蛭兒又生淡洲と有る其結小此亦不以充兒數と有て淡路洲ハ其次度小生給へる小て同時小成れる洲ふらぬを一合せて為胞と云事甚と心行ぬ傳かり淡洲と淡路洲と其成れる時の同らるざるハ古事記も元より右の如くふる上小舊事記も其如くふれバ今云儲此より下の傳小ハ唯大八洲國小限小非るふり△の異説耳を擧りて前後小事實の文無ハ正書又他一書共の中小何れが同らる傳有る故小略き載りれざりける者ふり弟二より第五迄の一書小ハ大八洲國より以前の事實耳有て右等小國號を省れたるも

第七

亦此小同ら然れば正書一書相融通して一條の文の如く彼此を合せ讀べき所多しと知べし是即御紀の見様ふり○此小も淡路洲を大八洲の外小爲るハ正書小同らさふが共小誤ふり

一書先生淡路洲次大日本

豊秋津洲次伊豫二名洲次

隱岐洲次佐度洲次筑紫洲

次壹岐洲次對馬洲

此ハ古事記の數ハ合る傳ふて互ハ前後の異有れども共ハ正説と聞ゆ彼記ハ一ハ淡道二ハ伊豫三ハ隱伎四ハ筑紫五ハ伊伎六ハ津嶋七ハ佐度八ハ大倭リ但伊豫の次ハ筑紫ハ津嶋の下佐度の正ハ有べき者ナリ有ハ鈴屋大人説山蔭ハ八洲本文一書共皆異有り何れも古傳ふる可けれど其勝劣を云むハ弟七一書古事記と同ふ是ハ中ハ正しく可き其故ハ彼説ハ八洲の中ハ後ハ國と建しぬる限ハ一も漏れ又國と建しぬる洲ハ一も交りぬればふり其餘の説

共ハ先本文ハ大洲も吉備子洲との入たる此ハ後ハ建しぬる洲ハ一も却りて壹岐對馬の入ざる事ハ如何允て國と建しぬる事ハ良後の事ふれども必神代の由緒ハ關れる事ところ所思ゆれり寔ハ其如くふり口訣ハ其無越洲者不離大日本之故也有リ但正通主の越洲云れたるハ必予ガ説の如くハ非ズ北陸道を然云ると思ハれたるふる可き其ハ僻説なり傳六ハ説有り見ベ○正書及弟六弟八等の一書ハ雙生隱岐洲與佐度洲と有る其正説ふる可き事傳六百三十一ハ云るが如然るを此弟一書ハ隱岐洲次佐度洲とを別しハ生給へる如く傳たるハ誤ふり又此を以訂す時ハ古事記ハ隱伎

之三子嶋を筑紫島より先小置るハ誤して津島の次
 不在べき事愈著明故記傳ふも其を不審うとされ
 たる説有ふり其ハ傳六百四十三丁佐度洲の説小就
 可ふ○壹岐洲對馬洲を此傳小大八洲國の中小收り
 れたるハ古事記の正説小合へり但此の次第も其記
 小依て正さバ一小淡路二小伊豫三小筑紫四小壹岐
 五小對馬六小隱岐七小佐度八小大日本と生巡給ふ
 々爲べし其ハ二神の在し礮馭盧島小合交坐て其
 許して淡路洲を生し其より左小西小巡給ひ北小折
 れ東小巡り大日本を生て其本宮小巡復り給ふ可き

一書曰以礮馭盧嶋爲胞生
此等の委しき事ハ己小傳六由是始起
 事ふれども又此小
 少驚りし置ふむ
 アルフミニイハク

淡路洲次大日本豊秋津洲

次伊豫二名洲次筑紫洲次

吉備子洲次雙生隱岐洲與

佐度洲次越洲

以礮取盧嶋為胞之有ハ異ふる傳ふり古事記ハ唯意
 能碁呂島者非所生と有て己ハ天より降坐し即自疑
 成れる島ハ未遘合ハ為給ハざり以前ハ出来れ
 る嶋を後ハ生坐る洲の胞と為給ふと云事心得ず按
 ふより礮取盧嶋より為胞迄の間ハ脱文有ク今礮取
 繪島と云ハ畫るか如く甚彩ハハそハ依れる名ふる
 が其南ハ在る大繪島と云り然るを大神氏の日記ハ
 以礮取盧島為胞と云ハ叶へる由云ハ誤り彼ハ
 其彩色の麗ハハハハ依てころ繪島とハ云れ胞の意
 ハ非ズ思混
 不可ハズ

一書曰以淡路洲為胞生大

日本豐秋津洲次淡洲次伊

豫二名洲次隱岐三子洲次

佐度洲次筑紫洲次吉備子

洲次大洲

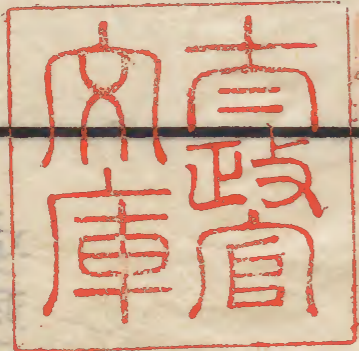
以淡路洲為胞ハ此ハ決ク以淡洲為胞の誤り其ハ
 淡洲を大八洲の員小入て淡路洲を兒數小充ざる可
 き理無ればふり然れば此ハ互小誤れる者に見ゆる
 の成る由緒ふれば古○淡洲ハ淡路洲の路字を脱せ
 るふゝし事右小註るが如く纂疏小所異傳以淡洲充
 兒數也と見ゆ
 一書曰陰神先唱曰妍哉可
 愛少男乎便握陽神之手遂

為夫婦生淡路洲次蛭兒

陽神の御和を省れたる事正書又第五一書の如く又
 妍哉可愛少男乎ハ第一一書の書様ふり説ハ其所
 小云リ其小ハ歟字ふるを以ハ乎小換たり共小阿那
 訓を誤る可うゝず新刻助語辞と云書小乎多疑而未
 決之辞或為問語歟句絶之餘聲ふど有て字義小亦
 異り○握陽神之手ハ誘ふし合給ふ状ふり便と有ハ
 其言出給ふ即御手を握ふり然れば陽神も妍哉可
 愛少女乎と和給ひ乍も亦握陰神之手と云事を為給
 ひつゝめども旁を省るゝハ誰も心着れざりける故

此小て二神の御手を握て相契し事ハ見え
 成ぬ者ふり通證陰神握陽神之手者不帝先言之
 取給ひ但陽神より先進也云こも其迄ハ非可
 兄皇子聘春日皇女御歌伊慕我堤鳴倭例伊慕我堤鳴倭例伊慕我堤鳴倭例
 毎倭我堤鳴磨伊慕伊慕我堤鳴磨伊慕伊慕我堤鳴磨伊慕伊慕我堤鳴磨伊慕
 坐交合時給ふの状ふれども此小陰神の先唱へて陽神の御
 手を握給ひ後小陽神も亦和給ひ乍陰神の御手を握
 して御妹妹の約束ハ成給へるふり谷重遠説小約
 束き蓋手握也と云るを今迄心ふる留めざりしうども
 此小て二神の御手を取交し給ふを見れば寔小尤ふ

言ふり然此の握字を舊く登理兵マ有を換て
 ども此ハ知岐流と云事の此小起れる由を云る小こ
 ろ有れ然しも深く泥む可ふねバ猶木の任小物爲
 又母都又都加牟ふと種と訓り〇生淡路洲の路字行
 ふり淡洲ふて有べき事第一一書又古事記小校べて
 訂了可し



日本書紀傳七
 卷之十四
 同日二十五月十四日

安政元年十二月十四日始同二年正月十四日成

明治七年七月十二日校合、管政人

